

太宰管内志

日向之二

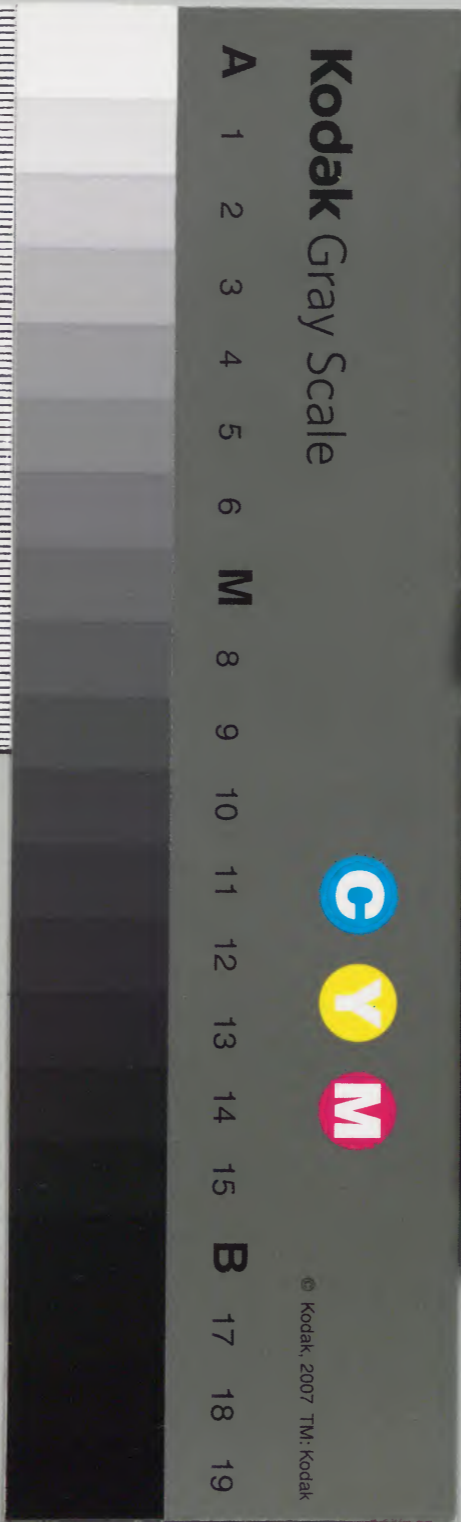
臼杵郡下 児湯郡

一七五三番

和書門		
二九六〇一	二〇二	八二
類	函	冊

内閣文庫		
二九六〇一	二〇二	八二
和書	函	冊

内閣文庫	
番號	和 29601
冊數	82 (16)
函號	176 44



Blank page with a faint rectangular border and illegible text.

Blank page with a faint rectangular border and illegible text.

曰杵郡三田井村有穗觸神社。毎年九月十五日行祭礼。是所謂高智保神乎。又同村有忍穗耳尊社。又四王寺峯。又自穗觸社北二町許有荒楯神社。是猿田彦大神之神迹也。と云へり。
 諸縣郡人百馬氏の説。高千穂山麓。神社二所あり。今ハ火焼て假殿。座寸。是二上神社なり。神官説。伊弉諾尊伊弉册尊を祭ると云へり。とあり。二所とある説。聊似つら
 古事記傳。或人云。白杵郡縣。西三里。有大陵。異氣甚而不得近焉。是可變陵歟。又或人云。白杵郡永井。可愛村と云。神社あり。傍百町余の山あり。絶頂。靈石三尖。又或人云。今日向國延岡の領内。則可愛と云所あり。そこは陵山と云物あり。山腹。神社あり。御陵ハ高千穂山の東南の方。榎岳と云山あり。其山中。迹々杵命の陵なり。と云物あり。里人大石明神と申すなり。と云

何きと古く故ある地とハ耳之多れど可愛の街陵。ハ
 曰杵郡三田井村。鬼ハ法師の墓と云物あり。昔鬼ハ法師
 と云鬼。然守窟。又住り。しと云。窟ハ三田井村の迹也。又
 ハ。九ツ戸。ハ一ツ鬼。こり。す。り。つ。け。る。石。立。己。峯。ハ。ハ。ツ。谷
 人。是。を。紙。又。摺。て。帰。る。者。多。し。窟。矣。又。ハ。ル。み。六。十。百。り。
 是。上。を。こ。え。む。と。す。れ。を。高。き。や。く。又。是。下。を。く。ら。む。と。
 村。の。七。ツ。池。と。云。委。又。仰。似。井。と。云。委。あり。是。又。十。社。明。神。
 内。供。料。と。り。代。往。古。より。五。十。石。り。り。六。月。七。九。日。祭。礼。と
 云。曰。ち。て。う。ね。ど。重。ね。て。考。ふる。事。も。多。智。保。神。の。あ。ら。う。と。云。り。
 曰。杵。郡。を。悲。件。の。件。大。地。ハ。日。向。平。家。御。祭。八。卷。緒。方。三。郎。分。系
 神。の。神。跡。あり。と。云。弟。ハ。る。と。あ。ら。ハ。

○ 姫嶽神社

源平盛衰記七三卷に昔日向国塩田と云處に大太夫と云
徳人あり一人娘あり其名を花御本と云み骨柄尋常な
り国中より同じ程ある者聲を成むと云を不誇徳不用我よ
り上様なる人ハ云事なり秘藏しけりと覺えて後園に屋
を造て此娘と住しけり程に男と云者を尊も早も通
ハうさふさづくより来あるとも覺えが立烏帽子の水
色の狩衣著ある男の七四五なるが田舎者とも覺えずた
とりなる兒みて花御本が傍に指寄て云云母云其人夕
来ありて曉還なるに住しけりて其行末を尋ねべしとて

芋手巻と針とを子へて懇に娘に教て後園の家を歸し其
夜又彼男来ありて曉方より歸りぬに教の如く女針を小手
巻の端に貫て男の狩衣の頭巾に指てけり夜明て後
角と告多れぬ親の塩田大夫子息家人四五十人引具して
糸の住を尋行く誠は賤が芋手巻百尋千尋を引もへて尾
越谷越行りぬと日向と豊後との境なる姫と云山と大な
る窟中へを引入ある彼穴口にて立聞りぬが大に痛吟す
る音あり是を聞人身も豎て怖りて父が教に依て娘穴口
にて糸を引へて云くハ抑此穴底ハ如何なる者侍る
を又何事を痛て吟せと問ハ穴中を答へるハ我ハ汝花

御本ッ許へ夜々通ひつる者なり可然契も縁も盡果て此
曉願下₂針を立ちぬあり大事の病₂て痛吟ふ我本身ハ
大蛇なり有₁形なき₂心出て見₁奉見度こそあ₁ども
日比の變化既₂盡ぬ本の貌ハ畏忌給ふべきなる₁心這出
ても不奉見世₂名残も惜く戀しく₁を覚ゆ₁是₂を尋
来₂給ふ₁ま₁を維忘₁ぬと₁ひひ₁ぬ₁心女の云₁縦
つ₁なる₁貌₂て₁より₁よ₁ぬ₁とも₁日比の情争₁忘る₁べき₁なる₁
心只出給へ最後の有₁様₁も₁見₁又₁見₁え₁も₁奉₁む₁つ₁ゆ₁怒₁る
し₁と₁思₁ち₁ず₁と₁云₁り₁ぬ₁心大地ハ₁穴₁中₁より₁這₁出₁ぬ₁長₁
不知₁卧₁ぬ₁長₁ハ₁五尺計₁なり₁眼₁ハ₁銅鈴₁を₁張₁る₁が₁如₁く₁口₁ハ

紅を含₁り₁と₁似₁ぬ₁頭₁ハ₁角₁を₁戴₁き₁耳₁を₁低₁ぬ₁頭₁ハ₁髮₁生
なり₁と₁して₁獅子の頭₁ハ₁異₁なる₁と₁す₁ぬ₁とも₁形₁は₁不₁似₁を₁
く₁と₁く₁涙₁を₁浮₁り₁て₁頭₁を₁指₁出₁し₁ぬ₁心女衣₁を₁脱₁て
蛇頭₁ハ₁打₁懸₁て₁自願₁下₁の₁針₁を₁ぬ₁心大地悦₁て₁申₁さ₁る₁ハ₁汝₁が
腹₁内₁ハ₁一₁人₁の₁男子₁宿₁ま₁ぬ₁已₁ハ₁五₁月₁ハ₁成₁ぬ₁と₁して₁十₁月₁に₁
て₁頭₁を₁あ₁る₁日本₁国₁の₁大₁将₁と₁も₁成₁ぬ₁心₁の₁つ₁ぬ₁とも₁五₁月₁に₁
して₁頭₁を₁あ₁る₁九₁国₁と₁も₁並₁者₁有₁ま₁す₁子₁矢₁を₁取₁て₁人₁ハ₁勝₁き₁計₁
賢₁く₁して₁心₁刻₁なる₁心₁斯₁る₁怖₁し₁き₁者₁の₁種₁子₁を₁あ₁る₁心₁を₁
穴₁賢₁す₁て₁給₁ふ₁心₁我₁子₁孫₁の₁末₁よ₁を₁も₁子₁護₁す₁べ₁し₁心₁繁₁昌₁す
べ₁し₁是₁と₁最₁期₁の₁詞₁を₁て₁大₁蛇₁ハ₁穴₁に₁引₁入₁て₁死₁に₁ぬ₁心₁彼₁大

地と云ハ即嫗嶽明神の坐跡有り塩田大太夫妻眷属おぢ
思きて歸り日數積りて月満花御本男子を生む成
長するに随て容顔もゆゝ心様も猛りたり母方祖
父が片名を取て是を大太童と呼ぶ既して野山を走行
れむ足はあつて常は分まりぬを異名も戰童とも云り
此童ハ烏帽子著て戰大弥太と云大弥太子ハ大弥次其子
又六七其子ハ尾形三郎維義なり大太より五代孫なり
心も猛く畏る者もて有りけり此惟義も兄弟三人有
げり次郎ハ死ぬを即名生三郎尾形と云二人が中ハ此
三郎ハ地子の末を継ぎ驗も有りけり後ハ身ハ蛇尾の

形と鱗との有りぬを尾形三郎と云とあり嫗嶽ハ宇婆我
多和と訓むべし名義ハ詳ならずと和漢三方圖會八十
卷ハ日向国嫗嶽明神在日向子豊後坂社領八十石とあり
嫗嶽神社ハ豊後国大野郡有とすさるる同神を日向と
豊後と兩國に祭まるとや其例也三方圖會説に依て考ふ
まを當国曰杵郡高千穂郷三田井村十社明神と云此社
往古より社領五十石付と云途固より西十八里とあり
さして盛衰記窟中地事ハ三輪神故事又肥前風土記褶振山
事の説を取合せて造まる物と聞ゆ尾形氏ハ大神神の裔
方御名抄に見えあり塩田と云村名いさづ考へる九別圖
ハ和名抄に見えあり塩田と云村名いさづ考へる九別圖

と按ずるに延岡西に三輪村と云物見えあり尾形氏の初
と右ありし延岡西に三輪村と云物見えあり尾形氏の初
の川尻あり延岡西に三輪村と云物見えあり尾形氏の初
の移ありと云と云

○長井駅

延喜式日向国長井駅あり長井ハ奈賀韋と訓へし名義

ハ川ニ由有て負せしむべし川を井と云例ハ天真名井ニ

国人云延岡城あり三里西よりて豊後ニ通ふ道筋又長井

郷あり此郷内ニ江田村と云もあり是古駅筋と聞ゆと云

○刈田駅

延喜式日向国刈田駅あり刈田ハ加利多と訓へし名義

ハ刈田郷内ニ刈田と云べし刈田駅証今ハ詳りな

○美祢駅

延喜式日向国美祢駅あり美祢ハ未泥と訓へし名義ハ

山峯ニ由有て負せしむべしさて九列圖延岡より肥後国

球麻郡米良ニ到り道筋ニ中原三子村一木谷ミカド戸月

と連ねあり國人云延岡より一里餘西ニ小峯村あり

往来筋なりと云る云々考ふべし

○八幡社

和漢三才圖會八十卷日向国八幡宮在北方悪七兵衛景

清信仰とあり。北方、北縣とて近園領とあり。此八幡社八
上人傳、宮崎郡北方村景清の眼精を祭て生目八幡と号
す。由いり。

○高千穂山

古事記上卷、詔天津日子番能迹、迹藝命而離天之右位、押
分天之八重多那此二字以音雲而伊都能知和岐知和岐氏自伊以下
十字音於天津橋宇岐士摩理籙理多多斯氏一字亦以下十字音降
坐千竺紫日向之高千穂之乂士布流多氣云云。書紀、高皇
產靈尊以真床追衾覆於皇孫天津彦彦火瓊杵尊使降之
皇孫乃離天磐座天磐座此云阿且排分天八重雲按成之道

別道別而天降於日向襲之高千穂率矣。一書、高皇產靈尊

孫天津彦根火瓊杵尊而排於八重雲以奉降故稱此

神曰、天國饒石彦火瓊杵尊、千時降之、心者呼曰日向襲

之高千穂添率矣、又引、天磐戶非分天八重節以奉之、千

時大伴連遠祖天忍日命師來目部祖天穗津大來目背負

天磐敷著按威高鞆手捉天拖了天羽羽矢及副持八日鳴鑄

又帶頭、搥劍而立、天孫之前、浮渚在之地、日向襲之高千穂

穗、日二上、率天浮橋而立、於浮渚之地、日向襲之高千穂

別、天神大伴宿禰高皇靈尊、五世天押日命之後也、初天孫瓊

杵尊神馬之降也、天押日命大來目部立、御前降于日向高

千穂、率既而皇孫遊行之狀也者、則自穗日二上天浮橋立於

浮渚在平心云云、一書、且降之間、先驅者還白有一神

居天八達之衢、其鼻長七咫、背長七尺餘、當言七尋、且口尻明

耀眼如八咫鏡、而葩然似赤酸醬也、即遣從神往問、時有八十

万神皆不得目勝相問故特勅天鈿女曰汝是目勝於人者宜
往問之天鈿女乃露其胸乳抑裳帶於膝下而笑嚶向立是時
嚶神問曰天鈿女汝為之何故耶對曰天照大神之子所幸道
路有如此居之者誰也敢問之嚶神對曰聞天照大神之子今
當降行故奉迎相待吾名是猿田彦大神時天鈿女復問曰汝
將先我行乎將抑我先汝行乎對曰吾先啓行天鈿女復問曰
汝何處到耶皇孫何處到耶對曰天神之子則當到筑紫日向
高千穗穗觸之牽吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川上因曰
榮頭我者汝也故汝可以送我而致之矣天鈿女遂詣報狀皇
孫於是脫離天磐座排分天八重雲按威道別而天降之也果

如元期皇孫則到筑紫日向高千穗穗觸之牽其猿田彦神者
則到伊勢之狹長田五十鈴川上即天鈿女命隨猿田彦神所
乞遂以送焉上細注の筆多し書紀の一次軍談一卷に稲飯命
則日向國高千穗大明神添島氏祖す○西國太平地十
卷二天正十五年二月月中旬佐伯惟定人數ヲ催シ土持次
即九郎親信が本城朝日嶽ヲ責落ス見エタリ惟定家臣匡
得ハ先主伊東入道が家ノ謀士ナリ匡房傳ヲ得タレハ斯ク
ハ名付アリタル なごえく多し高千穗ハ多可知保とよむへ
し万葉集 卷の歌又比尤加多能安麻能 北良伎多可知
保乃多气尔阿毛理之須賣呂伎能可未能御代欲利波自由
美乎多尔整利母多之麻可胡也乎多波龙美蕪倍氏於保父
米能麻須良多初乎乎佐吉尔多氏由伎登利於保世云云と

あり。さて各義ハ日向国風土記ニ曰杵郡内知鋪郷天津彦
彦瓊々杵尊離天磐座排天八重雲稜威之道別道別而天降
於日向之高千穂二上。奉時天暗冥晝夜不別人物矢道物
色難別於茲有土蜘蛛名曰大鉗小鉗二人奏言皇孫尊以尊
御手按稻千穂為勅投散四方必得罔晴千時如大鉗等所奏
搯千穂稻為勅投散即天罔晴日月照光因曰高千穂二上奉
後人改号知鋪とあり。福島氏云曰杵郡延岡より西八里ニ
高千穂莊あり二神峯と云ハ押方村ニあり高山の中らニ
神窟あり毎年の祭祀日ニかゝる參詣を常ニハ詣づる事阿
たも此祭日といへども他國の人ハ行事何れも此強々四

く時ハ四時の分ちなく電をあらはそめあやうき事つゝ
心々々々^に^は杰春樹云曰杵郡高千穂山ハ同郡高中郷より肥
後國那須米良五家などつゝつゝ其間の廣さ量知られ
從彼肥後の諸山より始よりて曰杵の高中それより豊後
の直入山ニ連る又肥後の阿蘇郡ニ至る次小豊後の日田
郡又連郷下井手村ニ至て終る其間峯つゞきなり此間の
道程七十五里ありといふ。常足云上ニ引出る風土記の
故事ハ古事記傳ニも辨へられぬ如く云々諸縣郡霧
島山ニ傳りぬと又紀又一書などにも襲高千穂より曾
峯なるともあれを風土記ニ曰杵郡とあるハ誤みて大隅國

於郡^贈又さ^りの^り霧島山方親しく其上笠狭之御崎又高屋
 山又高千穂宮あども彼霧島又近き辺と聞ゆれむ此方又
 定むべき^りとも思へどな^り此郡又正しく二上より高山
 もありて續紀又曰杵郡高智保皇神又風土記又曰杵郡知
 鋪郷又和各抄又曰杵郡知鋪郷なごあ^りは^りる^るも^も之
 より疑ふべき^りもあ^りば^りとも^もの^りく^りも^もし^りく^りあ^りれ
 る世のみなれむ令めせより何きを^りと^りとも^もさ^りふ^りめ^り可^り
 り^りを^り諸縣郡霧島山の件又大隅志贈於郡の内なご^りも^も
 奉^り後^りの考を^りよ^りな^りむ^り重^りて^り按^りず^り。又^り襲^りて^り考^りへ^りむ^りを^り鑑
 古^りの^りよ^りは^りあ^りし^りの^り聞^りゆ^りる^りは^り襲^りと^り日^り向^り大^り隅^り薩^り摩^り三^り国^り又^り定^りむ^りを^り
 彦^り神^りと^り伊^り勢^り又^り送^りり^りあ^りを^りと^り聞^りゆ^りれ^りむ^りなり。後^り細^り世^り命^り又^り猪^り田^り

の^り古^り跡^りと^り云^り物^り由^りあ^りし^りげ^りな^りむ^り。上^り記^り云^りへ^りる^り猿^り田^り彦^り
 又^り諸^り縣^り郡^り人^り有^り馬^り武^り彦^り云^り曰^り杵^り郡^り高^り千^り穂^り山^り麓^りより^り頂^りまで
 里^り許^りあり^り絶^り頂^り則^り二^り上^りなり^り上^り高^りさ^りハ^り二^り峯^り共^り又^り同^りト^り二^り峯^り相
 本^り事^りら^りづ^りら^りして^り壁^りの^り如^りく^り立^りて^りの^りさ^りけ^りう^りる^り間^りの^り深^りさ^り
 こと^り百^り間^り許^りも^りあ^りる^り一^り又^り此^り二^りの^り峯^りの内^り忘^りれ^りあり^り何^りの^りの^り
 方^りより^り有^りけ^りむ^り天^り浮^り橋^りと^り云^りその^り有^り長^り三^り間^り許^り廣^り三^り尺^り許^りあり^り
 橋^りなり^り是^りを^り渡^りる^り者^り踏^りち^りづ^り及^り時^りハ^り百^り間^り許^りも^り下^り落^りと^りり^り
 又^り此^り峯^り又^り岩^り穴^りあり^りて^り其^り内^り又^り鏡^り多^りく^りあ^りて^り常^り又^り曇^りる^り事^りな^り
 一^りと^り高^り千^り穂^り延^り岡^りの間^り又^り變^りあり^り時^りハ^り此^り鏡^り高^りく^り上^りて^り光^りる^り

千穂之峯皇孫神始此國天降之所也高千穂者貴豊富之辞也土地中肥民用不少公穀八十九假粟三十五九とあり例の覺束なる説なほ々々暫く引出つ古事記傳は高千穂山の邊を今も高千穂莊と云とぞ是智保御なるべし近世延岡なる主の領地にてそと近し表春樹村一曰軒郡高申と唱つげなる地丸て山岳の嶺國人云延岡より西行つると八里ありて高千穂地に入る高千穂凡て十八郷なりと十八村平地すくなけれが人家もしりくすくなし山間僅に家を造るむのりの平地を得て是に居る或一軒二軒或ハ四五軒七八軒ともいひしれど皆よきものにて一處に集まる事あり

多き土地肥ぬれを粟唐黍里芋よしこれと是を食とす貧窮なる者ハ終身米を食さざる者あり山險なれを川も又深し兩岸より橋を渡す事僅に一間二間或三間許の川なりといへども其深き事十間十五間或ハ廿間及ぶ獲葉と云魚多し羊魚又鯨と似ぬりと云と云僧神同ヶ筆記高千穂莊高六千石あり此邊男女共小布子ぎぬとて布ふとく織りぬるおと足冬共小着す山なると入りぬぬぬすく破るぬるなすくすく公役の人は足と云そのハ男女うす是を勤むるみなり男ハ荷物を運ぶ小皆脊に負持みなり女ハ頭上小置て運ぶ事なり頭上小おくをカミカと云なり此邊小然す小羊と云物多し小羊ハ大なる犬の如し脊ハ黒色小て腹ハ白し足ハ短くして心水気近き所小臥す者なり一角ありて夫を考るとて心水気近き敷物するおなり能垣あると多し皮ハ毛長く和ら小て敷物するおなり是を取らむと必鉄炮を用ふ甚身軽き物なり

正其行、又鳥の如く住む出でてい、早く草と云物の
生ずるあり、小住む出でてい、早く草と云物の
隅薩の隈、又鳥の如く住む出でてい、早く草と云物の
る、人ありて声を出ると時、他心、狼多く集りて人を害す
熊、行くと事なり、此竹筒とヨギリト云、其外醬油と竹筒小盛

○英彦御

和名抄小曰杆郡英彦御あり、英彦阿加彦と訓へ、伊勢国
英彦阿加彦、名義、諸縣郡、件小委く云へ、さて享和武鑑

小内藤、本河云云、帝鑑、内藤帯刀、口口、献上綿七把金馬代
并領卷物五子、寅辰午甲戌六月、参府、乙卯己未酉亥六月、御

暇時、献上正月御盃、臺時計、二月、鯛箱、小暑中、一塩、初春、寒中

船一箱、上虎御門、内大手ヨリ、十四下、浄土位牌所、三田小
大段中島下、あさふ、六本木下、ろ、六、や

山天曉院、菩提所、つ、つ、光明寺、七万石、居城日向国曰杆

郡、延國、三里、内海、上而六十五里、本名縣と云、城主高橋右近

居慶長十九年、有馬元衛門、佐直純、同佐衛門、佐長純、元禄五

年、三浦壺岐守、明敬、正徳二年、備後守、成英、同備後守、貞通、延

享四年、内藤備後守、政樹、已後領之、或人云、延國領曰杆、即三

宮崎郡、内豊後国、大分郡、速見郡、内す、七万石なり、延國、
城東、入口、大手前、の橋、又唐金のきり、珠あり、口橋新橋の
川、尾南、北、二分、まて、延國、城、め、和漢三万圓會、日、向、国、縣、一
龙、右、を、流、る、城、ハ、川、島、の、如、し、和、漢、三、万、圓、會、日、向、国、縣、一

各、延、國、至、江、戸、海、陸、二、百、九、十、五、里、南、至、佐、土、原、三、十、二、里、坤
至、肥、後、球、摩、三、十、二、里、良、至、豊、後、浦、八、里、な、ど、あり、又、九、州、國

又延岡の北方は南方、莊北方、莊と云物あり、是古の英多は南北の名を付て唱ふる事多し。東鑑は藤原四郎藤原の縣は申ある人多しや

○刈田御

和名抄に白杵郡刈田御あり。刈田を印本は列田と切ける誤りなり延喜式にも刈田と

あ刈田は加理多と訓べし。諸国は多き地名にて和名義は各抄にも數多見えあり

刈田姓人の住めりし處なるべし。刈田姓は武内宿禰の子

孫として。三代實祿十四卷は苜田首安雄賜姓紀朝臣此國安雄自言武内宿禰之裔也と見えあり

又同血脈の人多く住めりしと聞ゆ。地理事はいさづ詳な

らぬ。

○韓槌生村

塵添埴囊折丸卷は槌子、事日向國韓槌生村と云所あり。此

所木槌子木の生るりける歎い、槌生と書るは木槌槲

の生るるはあはす粟の生るる意なり。此處は小粟多し

昔加薩武別と云ける人韓國は渡て此粟を取て飯にて殖

多り此故は槌生村と云。風土記云俗語謂粟為區見然則

韓の槌生と云は蓋云韓粟林歎と云は槌字通兩物歎と見

え多り韓槌生は可良久自不と訓べし。さて古事記は日向

之高千穂之父士布流多氣とある則此槌生村なる山を云

々。又白杵郡三田井村は槌觸神社ありとしへを此處なる

べしな布よく考ふべし。

○速日峯ハヤヒノミネ

續千載和歌集に法皇御製

傾むりぬ速日峯は天降る天の御孫のくみそをまぐくよ。

やあり。名義ハ惣国風土記に白杵郡速日、御此所在山云速

日峯往昔日神御孫瓊々杵尊、兄饒速日尊到坐此山峯故云

速日土地中肥民用不少。公穀五十九假粟三十九とあり。さ

て延岡福島氏云白杵郡速日峯ハ今早日渡村にありて世

俗是を雙子フタゴ丘ともいふ延岡より西に當て道程六里許に

あり高千穂の入口より高山なりと云也。さて續千載の

哥に依て考ふる不速日峯ハ高千穂山の一各と聞ゆなり布

よく考ふべし。

書記通證に速日峯を那珂郡にありとするハひがごとなり

○光福寺

寺記略に日向国白杵郡行騰山大権現云云別當真言宗金

藏院光福寺寺領五十石云云国人云行騰山ハ白杵郡舞野

村にあり榎岳に續けり高山なり又愛宕山延岡南にあり

行騰山ハカバチの中程に大権現社あり鎮西八郎為朝の行騰を祭

ると云別當外に社人三家あり此山に瀧あり高三十間許

あり水幅三間許なり此水源人の通りぬ處なる人な

し此瀧に大なる岩指しあり瀧ハ此岩前を落るなり其岩

下岩屋の如くはななり窟廣さ八疊を去くべし近比まで
此窟中又異人住已髪ハ剃て髭ハ剃らず常は朱杖をつく
七十余歳に至て朱杖をつきて飛車三間よりくる此龍と
云ハ人家より半里許へくまゆ龍壺の大岩は牡蛎売多
くつらりと語まりくまゆ。

○藤岡山

神宮秘傳問答は天真名井ハ丹州真名井原ありと齋部
氏の説なりども今ハ外宮の坤方藤岡山の麓あり此水
を天瓊々杵尊御降臨の時持下給ふべきを遺置給へる故
に度會氏の先祖天牟羅雲命又天上に登て持下て日向國

高千穂宮藤岡川と云處は安置せしより此界の水も清き
ありなり云云雄略天皇の御代丹州より外宮は御遷座の
時又伊勢へ移りあり日向はて真名井有る處を藤岡山と
り小故は丹州はて其處を藤岡山と名付く今又伊勢はて
其在處を藤岡山と云と見えあり藤岡ハ不治乎可と訓べ
し藤の多き處なりて肩せしむべし國人云藤岡山ハ白
杵即三田井村より東南ありて楮川村の上なり藤岡川
ハ耳津方は流出る川なりと語まりくまゆ

○見湯郡

延喜式は日向國見湯郡あり和名抄は日向國見湯古由と

山多く川二流あり

二流のうち再川とリハ白杵郡より流せ出て此郡を経て海に入る二流と

と高瀬舟を望むのくよ小瀬やあはれ再川ハ天正六年十一月九日島津義久大友宗麟と合戦ありし處なり其事奇くハ九列軍記又見之あり三才図會又弘法寺在児湯郡天台宗本尊弘法大師自作法華嶽在児湯郡寺領三百石とのあどど法華嶽ハ諸縣郡也壽福院在中島村禪宗寺領六十石幸九云再川を渡りて町をづき北方又立岩権現として再川の辺り町口又社あり御社の後又大岩あり巡り二所許りして高き五丈許築立多る大岩なり此地神武天皇の血出結し所なりとソハ再川ハ取渡りたり

○都農神社

延喜式に児湯郡都農神社あり都農ハ豆奴と訓べし又

もよむべし海名鈔尔石見国那賀郡都農都乃多心もあり御名ハ地名又因て負せしるべし地名の義ハ後諸神根元折中卷諸國一宮神名帳尔

都農社大己貴神日向国とあり類聚国史九十二卷又安康天皇

三年丙申令品鳥忌寸菟日向国児湯郡都農神山得白鳥有

翼列卒吐血死亡者以方敷之終八月九日天皇有眉輪正之

被崩塵添堪鈔一卷尔日向国古庾郡常みを児湯郡とかく

又吐濃峯と云峯あは神杵を凡吐乃大明神とす申をなす

云吐濃大明神瘡をまじらふ必ヤシ給とくやか今ハ此物高於沙若有懐憤宜令平却と唱へて杵と云ものをして朝ごま又一二度あつらると三日水を瘡癒いゆ
之云へりとある吐濃大明神則都農神の御事也類聚國史又都農神山とあるも此吐濃峯事なるべし都をトて
も唱ふまは吐乃通ハ用ふる変例多るべし論々し續後紀
六卷に承和四年八月壬辰朔日向国子都濃神預官社ハ字

入あるるなるべし又たわらふ子字は湯郡
の二字を睨せるはともあるべし 同十三卷は兼

和十年九月甲辰日向国白杵郡無位都濃皇神奉授從五位

下うしは白杵郡と誤なり三代實録一卷は天安二年十月廿二日

授日向国都農神從四位上圖帳殘篇は白杵郡都濃御有神

見えあると例の覺束るき上は地理の事なるなほあり又

三才図會は日向国都農大明神在見湯郡宮村祭神一座大

己貴命号宮崎社又一宮記神社啓蒙諸社一覽本朝年代紀

なほふも見湯郡都農社ハ大己貴神を祭るよし見えあり

上田氏云守丸と云人の説ふ今延園より六里半許南は行

て津野所へいりむと云る處をうへ前方は社ありて其鳥

居は都農神社と云額を掛ありといへり實明云津野郡地都

日向国一宮とあり社司金丸氏某と云街道辺り是より

北へゆけむ都農牧今もあり良古云都農神官云此社よ

巴川傳ひは登きバ社の旧跡ありそこは石二ツ立り其形

角の如く故又ツノを云と云へり高鍋侯あり都農神社は

元五石社領つり此社の事社地のさ方又神官の姓名祭

日又社のありかこの事その外社領古文書をたあはば奉

る記してありぬらしき

○都万神社

延喜式は見湯郡都万神社あり都万ハ豆末と訓べし御名

義ハ地名は因て肩せしるべし其地名の都万ハいりなる

まは和名鈔は隱岐国隱地郡都麻々又紀伊国名草郡津麻

郷なるありあるふは井門田里榎木原又作専万守廣呂

を井トカノサト下を何キハラとよむりさてうらむ今
此郡のうちの村名なりやたしりなることハあききび。因
人云妻万官より三十町をわたり東より谷とリ小所あ
てその南よりろき谷ありその中東より百二十間許
西より出る所あり横四十間許あり東のより大な
る堀あり西のより御殿地あり谷筋の田地より高き更
三十丈あり此南の谷を隔て屋根塚とてあり其塚高十七
間根より百八十間あり又屋根原とて古墓二十三區あり
但一丈二尺已下也。重政云井門田ハ井モカを唱ふるり。
國人云伊藤の乱は妻社の三十六ヶ寺の社僧悉く滅せり。
續後紀六卷尔承和四年八月壬辰朔日向國子湯郡妻神預
官社三代實録一卷天安二年十月廿二日授日向國從五
位上都万神從四位下。此神承和の比まで無位なりを其
十年とりふとの九月は高智保神
都濃神は從五位下を授けありし時此神も神位を授
けたりしなるべしさを具比の紀はるへふるいれ
るう又ハ活本なるを彼是考へたど見えあり日向國人云
なるのれ本もあるべし

児湯郡妻万村尔妻万宮とてある是都万神社なり木花咲
也姫を祭ると云傳ふ佐土原城主より神領三百十五石を
寄附ありしり。神宮三十余家あり大宮司法元氏権大宮司
國人云政所より杉田氏小祝河野氏奉幣本部氏是まで上
官也此外ハ下官なり。社僧二家あり。一兼院神宮寺是なり
といへりき。此日向國の人といふハ此社又近きありり
社の神官のよりなり。常足都又をのせし時此
人又めぐりありて右の事ハきりたりしを其人の名ハ志
きありさて都万神社とし小此社の事なるべしとれども
近世の日本輿地圖は因て按する見湯郡と那珂郡との
間ハ宮崎郡をへてありはしり。あは定めがしり。そ
べて是らの事ハ昔ハ何郡の内よりけるを今ハ何郡の内
よりありしり。事又ハ何郡の境より何里なりり。方
明らなり。なむり。小ことと委良古云別當一兼院二十石。社

僧神宮寺廿四石。神主法元美濃廿四石。政所杉田内記廿四石。小祝河埜内近三十二石。修行本部讚岐十二石。已上を上官と唱ふ浅黄祠官橋口石見三十二石。黒木内十二石。黒木津之丞十八石。大石丹波十二石。橋口和泉五石。己上女也。内侍おせん三石。權祝河野河内五石。也。正一位おぎん八石。杉田平太八石。橋口小太郎神宮寺の内より三石。樂人小玉伊平八斗。河野半左卫門八斗。鐘つき法元奎之丞八斗。有馬氏云兒湯郡井門田里都万神社本宮木花岡邪姫命御殿横三間舞殿横三間竪三間并殿横五間竪二間并殿と舞殿との間一間但東向末社四十八社。社地廻四十五間。四面玉垣の

外子大なる楠多し。大さ六尋七尋鳥居の外西方櫻の並木三町許

あり。此宮より羊里とありて迹々并尊宮ありて

あり。この處より又羊里むらりて迹々并尊宮ありて

あり。天領なりとも毎年の祭又木花岡邪姫命御殿ありて

人云見湯郡右松村内倉谷の陵はいすゞ川の川岸五十大

の岑子在て瓦右の地今、後より遠く奥に崩き入て大谷と

成る。陵地むかり全く強りて高く登りしり。長五十間高

さ三丈同三宅村、内徳本郡、原の山、陵を又さぎの命の御

ろり云高き九間頂上、平地十七間地盤よりり六十四

間余地盤周流二石三間御塚官幣所ともは惣地盤周流三

百三十一間官幣所長六十四間同高さ二十間同横中四十

の堀中八間築地敷十間高三間御塚所築地より築地より

塚と云ふあり高二丈五尺よりり二十一間、高さ十九間、頂上

の平地 堅十八間 横十四間 地盤 惣周流 二百七十間 堀中七
間 築地の形 たるけり 水は 八間 積り 延長 三
十四間 九段 殿原の内 あり 所の 陵 而七十六 區 あり 一里
左右の地 あり 處 五百七十六 區 あり 六尺 以下 あり 八
を 除く 高さ 壹丈 より 五六尺 まで 又 根 盤 十間 あり
より 五十間 而 間 而 五十間 二 而 間 まで 又 至る 此 原 より 東
及 良 三里 余りの地 五ヶ所 十ヶ所 又 三十ヶ所 余り あり
所 あり 又 南 及 坤 四里 余りの所 あり 如し 左右 八里の
地 一般 あり 堀 あり 其内 あり 廣大 あり あり 小坂 島 地
ら あり あり 誤り 堀 穿てる 事 あり 太刀 鏡 や き 物 など 種
出る 内 あり 太刀 八尺 二尺 余り 四尺 余り 至る 中 三寸 四
寸 あり あり 然し 骨 の出 あり 事 あり 景行 天
皇の 跡 石 今の 石 神 是 あり 右の 説 三宅 村 人 兎 玉 實 満
カ 著 書 見 たり

○児湯駅

延喜式 日向國 児湯 駅 あり 地理 いま 考へ ざら ども 必
海 邊 近 あり べし 今の 延岡 より 高鍋 まで 官道 東

海 近 あり といゆ 古の 道 也 此 筋 あり べし 白 杉 郡 長 井 乃
官道の 筋 あり といふ たり とも 今 至り たり

○丹裳小野

景行天皇 紀 十七年 三月 幸 子 湯 縣 遊 丹裳 小野 云 是 日

涉 野 中 大 石 憶 京 都 而 歌 之 曰

波 辞 枳 豫 辞 和 藝 幣 能 伽 多 由 區 毛 位 多 知 區 暮 夜 摩 苔
波 區 珥 能 摩 保 羅 摩 多 多 難 豆 久 阿 烏 伽 枳 夜 摩 許 芥 例
屢 夜 摩 苔 之 于 漏 破 試 異 能 知 能 摩 曾 祁 務 比 苔 破 多 多
彌 許 芥 幣 遇 利 能 夜 摩 能 志 邏 伽 之 餓 延 塢 于 受 珥 尤 勢
許 能 固

是謂思邦歌也

風土記は卷向日代宮御宇大足彦天皇之世幸見湯之郡遊於丹裳之小野謂左右曰云

とあり丹裳小野ハ尔毛乃乎奴とよむべし

書紀にも云

をつけりぬルバ去るくかくうつさるを万葉集九卷は吾妹見之赤裳泥塗而殖之田乎斯將藏倉無之瀆なぞ見元てアカモといふ例ハあるとニモといふ事なり水むいハガあらん今志してハさざぬがさざりざんろ布よく考ふ又阿加毛乃乎奴ともよむべし日向國人云丹裳小野

ハ三宅村内なり名義地理ともよいふ考つにハ地名

あるべし猶うの國人は多う禰てさざむべし黒不重政云丹裳の小野ハ三宅村内ハ丹花寺と云所ハあり大王馬場南の出づルハあり大石あり長六尺許横三尺許あり良古云見湯郡覆野村景行天皇の躰玉へる石と云りのあり今ハ土又うづりてゆる所ハらづり又六尺ハ三尺許るり三宅村内覆野又フクノハ階の社あり

○韜馬峯

塵添盞囊鈔一卷ハ人数を何口と云るうの跡なきと

あり日向國古度郡常々見湯とわくハ吐濃峯と云峰

あり神たるハ吐乃大明神と申なる昔神功皇后新羅を

うり給の時此神を請ふ給ひて御船を乗給ひて船舳令讓

給ひけるハ新羅をうりとりて歸給て後韜馬峯と申所ハ

たろて弓射給ける時土の中より黒き物頭さし出るる

を弓のさびにて堀出し給ひけるハ男一人女一人を有け

る其を神人として召仕ひける其子孫今ハ残水は是を頭

黒といふ初て堀出さる時頭黒くてさし出たる故尔

や子孫ハひろらりけるが疫癘又死失せて二人ふるりた
るに其事わかの國の記にいへるは日々死盡僅残
男女西口と云ふり是ハ国守神人をかりつうして國役
志あがはしむる故尔明神いかりをなす給ひてあは病
起りて死なふるなり是を思へむ男女をも口とハ云べき
よこそ覚ゆるなり云とあり。韃馬ハ字志加をよむべし。
元本の假名又ウシカ也。あてて韃馬をウシカとよむハ
いりたる故とも今知りがごとし古事記ハ牛鹿臣續日本紀
又姓氏録等ハ字自可臣と云姓あり。重政云見湯郡新納山
ハきまらぬ又並ぶ大
山々り此山の南の麓はツノ町あり則津大明神の地なり
ウジカノ峯ハ新納山を云なるべし。

○三納御

倭名抄ハ見湯郡三納御あり。三納ハ美奈波とよむべし。肥後
國柄納をクナナハとよむ例なり。又元後ハ三納山といふ
もあり。納ハナフの音なるをそのつをハよかりたるなり。
名義いよご考ふべ。さて五郡の歌ハ見湯郡三繩代あり。是
なるべし。今も此御あり。三納代ハ幡社としてあり。三繩代ハ似つる
ろしき地名より考ふべし。ミノウとクミノブとク云
處あり。むその川とてあるべし。又ありハ新納をニヒロ
とよむ例。またミイロとよむりさうむ三ナハシロとハ
見より別なり。な布考ふべし。良古云三納ハ今ミイレとよ
むるハミイレ山とてあり。ミナハ
ろハ佐土原願なり。

○穗北

倭名抄ハ見湯郡穗北御あり。穗北ハ保岐多とよむべし。名

義ハいづづ考へ此あひていづづ祈田の意玉をホギタ
とよませし。さて寛知集子見湯郡穂北村あり。又九州圖子
もホギタあり。今ハ天領子て長崎支持子なり。

○大垣オホカキ

倭名抄子見湯郡大垣御あり。大垣ハ於保加支カキとよむべし。

名義地理ともよいし。考へ此垣ハ今の世は柿ろとカ
やさる地名あり。考へて志ろしおうあきろん国
人云今も大垣村あり。肥後国飽田郡子小垣と云御名も有。

○三宅ミヤケ

倭名抄子見湯郡三宅御あり。三宅ハ美也ミヤケ和とよむべし。諸
又多子御名義ハ屯倉のありし處なるべし。さて寛知集子

見湯郡三宅村あり。天領て長崎受持の
所子り此子ハケ村。

○観ミ啖ケ

倭名抄子見湯郡観啖御あり。観啖ハ尋ミとよむべし。大隅
又同例子なり。五郡の哥ミル見湯郡觀於郡御あり。上田氏云

略程全図子見湯郡都於部あり是子也。常足ミ按ミる子又ミ觀ミ啖ケ
領也と云處あり是子也。興地ミ図ミよミる子ふミウミスミキミ郡ミ門ミ川ミ庄ミ圖

内ミ都ミ於ミ郡ミ御ミとミしミふミのミありミ佐ミ土ミ原ミのミ領ミ内ミなりミ元ミ龜ミ年

中ミ己ミ前ミハミ伊ミ東ミ家ミのミ居ミ城ミなりミ今ミもミそミのミ城ミ又ミ塹ミのミありミ

○佐土原御

圖帳殘篇に見湯郡佐土原御土地上肥民用繁多出紙麻松
 修竹公穀百二九假粟六十九とあり。佐土原ハ龙度汲良と
 よむべし。佐土ハ狹門の意なり。て肩せしる。て武鑑
 又島津氏柳間朝散大夫二万七千七十石余居城日向國那珂郡佐
 土原海陸三百九十三里内江戸より大坂まで陸百三十三里大坂より海路二百六十里冬九里増當城代々
 島津氏領之。島津義久の舎弟島津右馬頭和漢三才図會に
 日向國佐土原至江戸海陸二百九十里を記あり。是も図帳
 の事ハ例の賞束なかりれど志ざりて引出つ。古本九州軍記
 五卷略記に天正三年七月争島津修理大夫義久与日向國縣

城主伊東入道領地之隈及合戦日向國住人土持彈正少弼
 親成為救伊東出馬同月四日義久侍大将伊勢宮内兵卫山
 口孫太郎引率七十余入著陣干松寺先午川上七助出水玄
 蕃允以二千人平懸相寄敵陣伊東土持等命先午足輕云
 云侍受敵寄搦鉄砲三百挺令打倒出水川上等雜兵三百余
 人作岡大進出水山口等軍忽敗引入于大隅國。至天正五年
 春大友幕下士日向國士土持彈正少弼親成一説久保山後治部とあり
 大友家内通島津家宗麟大怒以朽綱佐伯小佐井等為大将
 遣六千余人三月八日大友執署陣日向國橋峰与土持家老
 奈津田孫九上門合戦於是島津勢為土持後詰出于縣表大

友四將聞其由急追落土持奈津田孫左衛門戰死土持為囚
之間薩摩勢引入于大隅於是豊後亦引上軍入馬臼并土持
親成於豊後国浦部被害隱徳太平記五十八卷又同十月宗
麟國中勢を相見して府内を發足あり云云國々城主追々
馳付て都合四万三千余騎竹串と云所ル勢揃して日州御
門城又ハ柴田紹安同五右衛門山田土佐入道堯徳三人ハ
一千二百人相添て入置き壺矢の城ハ畚藤内記兵卫塩
手左助胡麻津留新助三人又一千三百余人添て入置残三
万八千九百余人日州高城を攻むべしとて大隅国務志賀
尔逼留して先前後の陣隊を分ケ玉ふ先陣の左備ハ一番

吉弘鑑直手勢一千七百余騎相備へ三重岸目両所武士汝
見日知也門阿城主相加ハる古本九州軍記七卷天正八年
島津回書助新納武藏守八千余人又日向國宮崎は著陣
此大友方より志賀朽網田北佐伯をこめ置ある見湯諸縣
の兩城を攻んと此豊後勢ハ是を聞所々の砦亦も解遣し
城々より打出て見湯尔陣をとり島津勢と對陣此爰尔浅
岡の城とて砦あり戸次山城守鎮秀入道并足達左衛門こ
め置る彼浅岡の城ハ島津勢陣取の後尔在り此ハ島津回
書助此係置ありし後の決るるべしとて四月九日浅岡山
の麓は押寄りる戸次足達兼て期したる爰尔此ハ城中静

あり込て音もせぬ。此城ハ僅四五町四方の丸山を續きの
尾崎を堀切て上は堀一重あり城の構へ堅固なるべしとい
へども四方坂嶮よりしてたやすく登りつゝし。寄手四方を
よりつらゝし用を揚て攻上るべし。此城ハ城中より鉄砲をも
打出さば敵ハ二重の堀切を越させ矢懸りよく引付て
戸次足達持口を走せ廻りせハ能く下知されば鉄砲を
つるべてお放つ其表は進む士ひひくくと打殺さるつめか
へく打放つ鉄砲は寄手より島の島津勢志すてさつと
引籠り勢をよめり。此城輒く攻取りつゝき上は見湯
より後詰あるべしと杉浦と云慶は陣を替て戸次足達四

五百許の勢を以て大敵を防込を手柄之程無比類とて義
統感書を給ひたり。浅岡城と志賀朽網田北等の豊後勢陣
所と見湯川下とハ行程二里許有り此は鉄砲の音山彦ハ
應て手は取様なりさるゝも程近き味方の城をいりて
知るざらん。されども其日後詰せぬ内々志賀親安と戸次
鎮秀入道宗然と不快なり。此は慶の後詰をせざりし
と云沙汰ありと賣ハ島津勢ハ恐まをりし。後詰をせざり
しと聞ゆ。同年四月廿五日志賀親安朽網鑑康田北依伯木
付己上五頭一万許の勢を以見湯川上杉浦ハ出張して島
津新納と一戦島津方ハ待合戦大友方ハ懸てはる戦な

きバ島津備^トて鉄炮を以て討立るゝ敵ハ事とも其破て
懸る處を鑑武者一面尔立並て突退れを鉄炮を放りけ備
るゝと久く戦ふと豊後勢の度毎に追卷る此一備
へも破り得じ本の陣所見湯の川上より引込をかく已久
を浅岡も小勢にて始終持て難しとて用退て戸次足達白
杵をさして引入り其後大隅より加勢を招寄島津因書
助其年十月まで見湯は在城より程は日向國中大友よ
り手を指事を得て那珂諸縣島津軍入より

○韓家

倭名抄に見湯郡韓家御あり韓家ハ加良也とよむ
筑前國宗

倭郡辛家^マの豊前國宇佐^{ウサ}佐^サ名義地理ともふいさ考へ
郡辛島^{シマ}の^マ見之^ミ多^タり
志ひてあり^シと韓家ハ韓人のうづり来て^キめり^メより
負せ^フる^ルを^シて^テある^ルべし^シ播磨國風土記に韓荷島^{コリマ}韓
人破^ク所^ト漂^ヒ之物^{モノ}就^ツ於^リ此^ノ島^ニ故^ク云^フ韓荷島^{コリマ}も見^エ之^タり^ニ國
人^ノ云^フ此^ノ郡^ニ又^シ模^シ谷^ノ村^ニ有^リて瓜^ノを多^ク作^ル所^トなり

○平群

和名抄に見湯郡平群御あり平群ハ倍久利^{ヘキリ}と訓べし^シ諸國
多^クなり
地名義ハ平群姓の人の住りし處なりべし^シ平群姓ハ
群郡より出たり^リさて姓氏録に石京皇別平群朝臣石川朝
臣同氏武内宿禰男平群都久宿禰之後也^ト中^ノ龍京皇別南
朝臣紀朝臣同祖紀角宿禰之後也^ト多^ク見^エあり^ニ是^レ因^リて
か^ク一^ハ武内大臣の子孫多^クこの國にあり^ニと聞ゆ
都野平群折田^ノと上田氏云寛知集に見湯郡平部村あり
かの大臣の後なり

部ハ群を誤るゝの考ふべし

○米良御

東鑑北四卷

建保七年

專良五郎云云とあり。專良ハ米羅とよ

むべし。名義いさぶ考へば。丸形を按ずる。日向と肥後

との間。又米良山として大山あり。又日向方。因て本米良と

云處もあ也。又五郡歌と云物。又見湯ハ多。新納。穂北。御

納代米良の推葉。都於郡までとあり。

推葉と云も御名。志。此五郡

奇と云もむけ。近世の事と申之。此ハ御地の定め。ハ

今と異なる。今もあるべし。さて和漢三才。因會。日向。國

米良。添あり。肥後。國。又も米良山あり。同山のつ。き。り。り。同

國。球麻。郡。女良。氏。の。事。ハ。季。ハ。肥。後。志。下。卷。ハ。い。り。り。興。地

國。又。依。て。按。ず。る。又。米。良。ハ。肥。後。國。夕。之。郡。内。也。奈。須。より。ハ

敷。里。南。又。あり。也。日向。國。見。湯。郡。の。地。ハ。さ。し。出。た。る。處。也。

米良。より。出。る。川。ハ。神。門。川。と。合。て。東。又。至。て。高。城。川。と。り。り

助。部。城。の。北。を。流。き。て。海。に。入。る。奈。須。の。水。ハ。東。又。至。て。日向

國。印。旃。郡。の。入。行。騰。山。の。南。を。流。て。延。岡。の。南。北。を。流。て。海。に

入。米。良。内。の。推。葉。と。云。ら。る。る。べし。米。良。ハ。肥。後。の。内。り。り。

隱。徳。太。平。記。五。十。二。卷。又。天。正。の。比。肥。前。國。士。ハ。推。葉。安。藝。推

葉。一。六。ろ。と。あり。青。柳。大。人。云。推。葉。山。ハ。今。ハ。御。領。又。て。肥。後

の。方。り。り。ハ。舍。米。良。を。過。て。推。葉。又。至。深。山。幽。谷。の。地。又。て。大

材。多。し。公。儀。御。用。の。材。木。を。く。く。又。て。伐。て。肥。後。の。ク。マ。川。に

流。八。代。の。海。辺。又。て。舟。積。し。て。上。方。又。登。り。也。當。世。日。向。材

木。と。て。諸。國。に。出。る。ハ。こ。こ。此。辺。り。り。國。人。云。米。良。又。米。良。の

本。宮。と。り。り。社。あり。磐。長。姫。を。祭。り。と。り。り。櫛。の。木。又。釘。の。生

て。ある。木。あり。二。寸。三。寸。或。ハ。五。六。寸。も。あり。甚。多。し。上。釘。ハ

ふ。と。く。下。の。釘。ハ。み。み。し。一。本。あり。り。り。水。を。又。外。に。櫛。釘。の

出。る。櫛。出。來。る。あり。て。絶。る。更。あり。り。り。國。人。云。天。明。元。年。禁。裡。御

造。營。の。所。此。推。葉。山。より。太。き。南。天。の。木。を。出。せ。り。長。さ。三。間

太。さ。七。寸。角。ろ。り。り。と。り。り。此。辺。又。て。熊。を。と。る。又。五。等。あり

キ。ニ。熊。茶。熊。ウ。ド。熊。穴。熊。黒。熊。と。て。あり。キ。ニ。熊。と。云。ハ。白。毛

又。て。常。々。茶。草。の。根。を。堀。て。喰。小。此。辺。ひ。り。人。參。の。多。き。所。な

き。ハ。多。く。是。を。堀。て。喰。小。太。木。の。上。に。上。り。て。臥。せ。り。小。膳

と。よ。く。透。き。り。り。り。て。荒。白。ろ。の。如。し。琥珀。印。と。り。り。小。極

上品。ろ。り。次。ハ。茶。熊。と。云。ハ。茶。色。の。如。し。大。方。瓶。ろ。り。り。の。色。の

知。し。木。の。実。許。を。喰。小。ろ。り。此。熊。の。膽。も。琥珀。白。印。と。り。り。と。次

ろり。ウド熊と一ハ常ニ虫ヲと取テ喰小伏る時ハ木
のうとくなるニ入テ伏ス。次ニ穴無ハ常ニ穴ニ虫ヲ
狸兎ヲ取テ取テモむろり。熊穴無リツルモ色ハ浅黒
ニテ木ニハ登クモ穴ハ三方ニ口を明けあり是を取
ハニの穴よりふくべテ一穴より出る所を鑿ニテ突テ取
るろり。又うづのあををろり置テ其子を取る是を子飼
又とるのあは。此外の熊の子ハとりグ。取テも子飼
又ろり。次ニ黒熊とリ小其色甚黒し常ニけ。あをを取
ててモむろり任所定。岩々とのく下ニ伏する物
ろり。膽ハ黒くして吐きこる事ろり。下品ろり。是らの膽
も添印
とッ

○都野

倭名鈔ニ見湯郡都野郷あり。都野ハ豆奴と訓べし。名義ハ
角臣の任めりし處なるべし。角臣の事ハ平群郷の件圖帳
の細注にいへるが如し圖帳
残篇ニ白杵郡都農郷土地中肥。民用不少有神号都農社所

祭饒速日尊也。公穀九十九假粟四十三丸とあるも白杵と

あるハ誤。又て實ハ此都野郷を云と聞えあり。又三才圖會

日向國の道筋の三江野津野里財辺城あり。國圖

又財辺より津野ニ四里ともあり。國人云今も見湯郡津野

村ありて駈路の筋なりといへり。周防國都農
郡都農あり

○都濃牧

延喜式ニ日向國都濃牧馬あり。都濃ハ豆奴とよびべし。名

義ハ都野郷と同義なる。異處なるを異義又てもあるべし。さて此都濃も

かの都野郷のうちはある。又ハ異處なる。輿地圖ニ因

て按ずるも財辺城下より東方の海辺ニ津野崎と云處あり

巴是ハ取路の筋とハ是ナトトヤ昔の牧人のあとの今も
あまののらりたるもあふべし又今の牧はツノとよふ慶
なまハなきまや秋月の頃分は都野牧とて馬牧あり

宇佐大鏡は日向国児湯郡打角別府起請定田云云同社縁
起古文書ル御寄進状宇佐宮御宝前日向国打角別府地頭
職事右為聖朝安穩異國降伏殊有御祈願所被避進也者依
鎌倉殿仰奉寄如件弘安七年二月廿八日正五位下駿河守
平朝臣業時正五位下行相摸守平朝臣時宗御教書日向国
打角別府地頭職御寄進状被献之建治元年為異國降伏被
寄御領之處弘安四年賊船悉漂倒畢而今可襲来之由有其
聞之同任彼例所奉寄也殊抽懇丹可令啓白之伏依仰執達

如件弘安七年二月廿八日宇佐大宮司殿駿河守相摸守と
あるも津野を云り實明云都野牧今もあり重政云津野牧
新納山の東の麓はあり新納山ハラス
天山ともいふ志まよ
あは高山なり

○國府

和名抄は児湯郡國府又拾枚抄は児湯府とありさて此國
府の趾とりかとの今もありや志しはと三宅と云地名
あはむそのあははまもあるべしな布國人は國府ハ今
の高鍋の地るとはあはぬ不や三才回會ル財邊一名高
辺至江戸二百八十里半但美美津湊六里半自此至大坂海
上五百五十二里如冬月寄豊後佐賀関及周防上関舟路二十

一里増共七十三里。午未至佐土原とあり。印ヤク大明神の地則府中と云是
国府の地有りといふ。重政云へり。良古云児湯郡ツツの社有り。
未申子當て三十町は三宅村あり。覆野ハ此村内有り。

○國分寺

類聚三代格又天平十三年三月十四日符云。一毎國僧寺尼
寺各可施水田一十町。一毎國造僧寺令有二十僧其寺名爲
金光明四天王護國之寺とあり。乃布續紀十九卷も此國
の金剛明寺の事見之る
と此卷の三丁のうへに引出るは、はらへり。はらへり。さて
續記なるハ金剛とあり。金先とハ別なるが如くもあり。
ちるもどなる。さて中原直直云國分寺ハ三宅村とあり。門
なきあり。大なる古佛あり。何也。此寺何郡とあり。云事
さしづなる證ハ、なれと國府國分二寺同所とあり。例な

道を暫く此處に出して後の考へをまつは、な。今
也。り。又金光明寺と云。光明寺と云。天王寺と云。寺と云。あり。を
そ。れ。も。あ。る。べ。し。な。り。は。禰。考。へ。て。志。る。べ。し。國
人云國分寺ハ伊藤氏所領の時ハ大寺なり。今ハ甚お
とろへて本堂も五間四面むりなり。文政七年より三十
年許りむりし。の天災悉く古き物ハやけて傳り。今ハ
古佛と云りのハ其比木食上人と云りの采也。てき。直
せ。已。眞。言。宗。の。住。僧。に。近。迎。也。山。伏
あり。て。是。を。何。つ。り。此。に。滅。罪。寺。と。あり。は。

○尼寺

尼寺の跡今ハ詳ならず。三宅村ハ七十五ヶ寺あり。と云
を伊藤氏の乱ル皆断滅せりといふ。類聚三代格又天平十
三年三月十四日符云。文を省く尼寺一十。其寺名爲法華滅罪
之寺とあり。天平神護二年八月十八日符云。一國分尼
寺先度之尼十人。後度之尼十人。合九人。布施供

養同為一法准先十尼之中一人死期即依先勅早滿彼數仍
國司國師共簡定申官待報特行但復後十尼者不豫此例云
云々とある也猶彼の此も今ハさぶりなすべし如き祿を國
書をひきき見て知可此も今ハさぶりなすべし如き祿を國
人ふあつ祿を志すべし

藤岡川

神宮秘傳問答云天真名井ハ丹朧真名井原ありと齊部
氏の説る所也今ハ宮の坤方藤岡山の麓にあり此水を
天瓊々杵尊御降臨の時持下給ふべきを遺置給へる故尔
度會氏の先祖天牟羅雲命又天上に登り持下りて日向國
高千穂宮藤岡川と云處に安置せしより此泉の水も清た
るをり云云雄略天皇の御時丹朧より外宮御遷座の時

又伊勢へ移しあり日向にて真名井有る處を藤岡山と云
故に丹朧もて其處を藤岡山と名付今又伊勢にて其在處
を藤岡山と云とあり常足按ずるに日向國藤岡山ハ物に
見えあることもなきにむ曰杵郡方なりむ又諸縣郡の方
なりむ志りがごとし諸縣郡の方とせむ大隅國曾於郡内
して尋ぬべし國人云曰杵郡行騰山あり舞野村内より甚
高山也榎の嶽とつけり高山也又愛宕山も高し登り九町あ
り城よりハ南アル也別當あり寺領五十石つけり真言宗
金藏院光福寺といふ行騰山の中にも社あり大権現と云
鎮西八郎為朝の行騰を祭る云云社人三人許あり此山に

珍しく瀧あり高さ三十間許あり水のまづ三間ばかり
 あり此水源人のゆくこころぬ祈る水はいくする所よ
 じ流き出るとりふ事を知人るし。此瀧の落る所は大方
 岩より出たり此岩の前を瀧ハ落るなりさし出ある岩の
 下岩屋のくまくふる水岩の下の廣く疊八十枚を敷べ
 し今より二十年前まで此岩下は異人住、正髪ハ剃り鬘ハ
 そくび常は朱杖をつく七十余に至りて朱杖をつきて飛
 こし三間に至る人家ありハ半里許あり。榎岳と云ハ日向
 國延岡より三里
東北はあり城下近辺にてハ極高山なり山上は石祠あり
 権現の社と云明和三年正月十六日此神の告はて榎山、陵
 と云物を知まりと云さて瓊々杵尊の陵と云ハ山、南の麓
 又高き七尺許の石ニありて其間ハ竹二本あり昔此谷を

竹谷と云大改村、百姓徳右門と云ありの此神を深く信じて
 詣づる人るが神の告はて此を探得ありと夫より近國、
 人々群集して今は絶に高千穂山よりハ東はあり、又
 児湯郡と曰杵郡との堺は大伯山として高山あり其處は石
 屋あり是吳、大伯の住、正し跡ありと云傳へり

○弘法寺

和漢三才圖會八十卷に弘法寺在児湯郡天台宗本尊弘法
 大師自作像とあり

